

祭り 経済効果考える

北陸に暮らすようになって 2 か月。各地に色濃く残る歴史の足跡をたどり、過去から紡がれてきた文化に触れることができることを、とてもうれしく、またありがたく感じています。ごあいさつが遅れましたが、日本銀行金沢支店長の武田と申します。以後、お見知りおきください。

今の季節は、多くの祭りが執り行われており、時刻表とにらめっこしながら各地を飛び回っています。昔から憧れていた八尾「おわら風の盆」。男衆の踊りがりりしい城端「むぎや祭」。若狭路の秋を神樂がことほぐ小浜「放生祭^{ほうぜ}」。真夜中にキリコが急坂を駆け上がる小木「袖キリコ祭」。今年見逃してしまった祭りも、必ず来年は、この目と耳で確かめます。

前任地の青森でも、たくさんの祭りを楽しみました。青森「ねぶた祭」と趣の違いを味わうことのできる弘前「ねぶた祭」、五所川原「立佞武多祭^{たちねぶた}」。深夜に 5 台の山車が別れを惜しむ、むつ「田名部まつり」。魚津「たてもん祭」や、七尾「青柏祭」などとともにユネスコ無形文化遺産に登録されている八戸「三社大祭」も華やかでした。祭りにはそれぞれに由緒と伝統があり、その風情と熱気は、その地その場に身を置いてこそ感じ取ることができるものだと学びました。

ところで、祭りには資金も必要です。豊作・豊漁の祈りや感謝のために神仏や祖先をまつるのだから損得勘定抜き……で済ますことができるなら良いのですが、できることなら地域外の人もみに来てお金を使ってほしい。すぐに経済効果は見込めないにしても、長い目でみた地域活性化に役立てられないだろうか、と考えるのが常でしょう。

では、観光客がたくさん来てくれればそれで良いのでしょうか。多くの観光客を集めても、宿泊施設がなければそのまま帰ってしまいます。かといって、年間を通じて一定の集客が見込めなくては、新たに宿泊施設を作ろうとする経営者はいません。経済的な恩恵は屋台での飲み食いやお土産物の売り上げに限られてしまいます。また、人が集まる書き入れ時のはずなのにシャッターを閉ざしている商店も少なくありません。

一番の理由は、祭りを支える側なので店を開ける余裕がないこと。自分も楽しみたいという方もおられるかもしれませんが。よしんば店を開けたとしても、道行く人は祭りにばかり目が向き、期待するような売り上げにはつながらないという声も聞きます。

では、どうすれば良いのか。残念ながら私も答えは持ち合わせていません。ただ、祭りを宣伝するのであれば、何を狙って、誰に対して、どんな宣伝をするのか。観光客を受け入れようとするのであれば、観光客に何を求め、どんな受け入れ態勢を整え、観光客を引き付けるためのどんな工夫を凝らすのか。そうしたことをしっかりと意識して取り組む必要があるのではないかと。祭りから日常に戻る道すがら、こんなことを考えました。